

# らい 来ぶらり 41

## 粘り強くなったか？

図書館長（理学部教授） 片瀬 潔

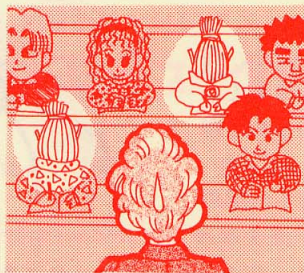
昨年度の対甲南大学運動競技総合定期戦は学習院の16勝13敗で36年振りの勝利となり、運動部の学生ばかりでなく、卒業生や教職員までも大喜びしたのですが、どうしてこれまで勝てなかったのか、いや、どうして今回（甲南がスポーツ推薦を始めた年なのに）勝てたのだろうか？ 体育科の斉藤先生の話では、最近ソフトボール部は対外試合で競り合って勝つことが多く粘り強くなったように感じるが、ソフトボール部に限らず学習院の学生の気質が変わったのではなからうかとのことでした。良い方へ変わったのなら大変嬉しいことですがどうでしょうか。

確かにここ数年、公務員上級職試験などに合格する人が増えていますし、私の所属する数学科でも良く勉強する学生が多くなったように思えます。しかし、大学の臨時定員増のせいで全体の学生数が多かった為に元気の良い学生がちょっと増えただけなら、それと同じ割合で元気の無い（失礼！）学生も増えているのかも知れず、あまり喜べません。全ての学生がそれぞれに目標を持って毎日の大学生活を送っていて欲しいものです。その目標ですが、大学に入ったらそれまでの抑圧の反動で遊んでやろうという人が多いと、少し前まではよく言われていましたが、学生部のアンケートによると、現在では、大学に入ったら

学問をしよう（当り前の事です）という人が増えつつあります。しかし、学問を志すには意欲と粘り強さがもちろん必要ですが、それらを支える環境も大切です。

今年の秋には法経図書センターが、今までの3.5倍も大きくなって装いも新たにオープンします。これで主として法・経両学部の学生の勉学に対する期待にかなり答えられる状況になると言えましょう。一方、大学図書館の方も、来年には大変身をはかりたいと思っています。今までも、コンピュータでの検索データがぐーんと増えたり、椅子が良いものに替えられつつあるなどと少しずつ変身しては来ました。しかし、学生からの要望の強い開架図書室の拡張、少人数で討論の出来る閲覧室やAV資料室の再開、そして

開館時間の延長等は、建物の物理的制約からどうにも手のつけようがないままです。これらを一気に解決してしまおうと、東一号館へ大学図書館機能の一部を移転し今の図書館を改築出来ないだろうかと考えています。もし、全学的な合意が得られるなら、来年度中にはめどが立つのではと思っています。“それなら粘り強さは来年から発揮しよう”なんて言わずに、まずは『学生生活の手引』の図書館の項（説明が見事！）を読み、今からどンドン利用して図書館になじんで下さい！！



# 「旅」の勧め

— 芭蕉の旅から —

教授(教職課程) 佐藤喜久雄

俳人芭蕉は、漂泊の生涯を送り旅に死んだ西行・宗祇を敬慕した。芭蕉自身もまた旅の詩人であり、元禄7年(1694)に「旅に病んで夢は枯野をかけめぐる」の句を遺して大阪で客死するまで、各地に足を運んだ。

何事によらず、ものを作る人は常に脱皮と創造とを求める。芭蕉の旅は正に自分を見つめ、次の高みを目指してのものであった。

もう一つ、芭蕉の特徴は伝統に沈潜してみようという姿勢である。伝統をいたずらに批判するのが新しい態度ではない。彼は伝統に浸りきることによって、新たな飛躍をとげようと試みた。

従って、芭蕉の紀行文には名所・旧蹟・歌枕の探訪がすこぶる多い。高校古典の授業でもなじみが深い『奥の細道』の旅では、殊更にそれが目立っている。

いまその中の一つを例に挙げてみよう。旅中芭蕉は山道に苦しみ、遠回りをしても芦野を訪れた。謡曲『遊行柳』で知られる柳を求めてであった。

枝ぶりが特におもしろい柳でもなく、田の

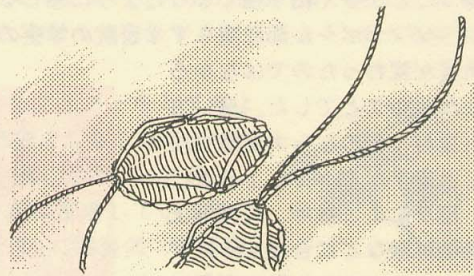
真中で絶景の地でもなかった。西行がたたずんで「清水流るる柳かげ」と詠んだその樹下に、同じように身を寄せて感慨にふけりたかったのである。

芭蕉は田植えを眺めながら、西行がここになにを見、なにを感じたかを思いやった。一本の柳を媒介に西行と心の会話を交わし、ふと我に返ると、早乙女たちは一枚の田を植え終えて立去っていた。心ゆくまで西行と語り合った芭蕉も、その場を後にした。

田一枚植えて立去る柳かな

あとに残るのは一本の柳と静寂のみ。心で感じ、心で語る、なんと豊かな「旅」であろうか。「旅」はいたわりの心をはぐくみ、ゆかしさを養う。芭蕉の俳諧には、それが見事に生かされているように思う。

いまや人々は、ジェット機で、新幹線で、マイカーで、東へ奔り西へ走る。ガイドブック片手の忙しい「旅行」も悪くはないが、時には好きな作家が杖をひいた地を、本を携えてゆったりとたどる「旅」を勧めたい。きっと作者の息吹が肌で感じられ、作品に新しい発見を加えることができると思うから。



図書館前方に辛夷こぶしの太木があった。開花時になつて無くなっているのに気付いた。後で事務棟建設の為に切られたと聞いて痛みが走った。東北生れの私には、春さきにこぶし魁けて咲くこの白い花に格別の愛着がある。別名たうち田打ざくらとも言う。この花が咲く頃田打ちが始まり、深い冬眠から目覚めたように農家は忙しくなつて行つた。(遠い昔の話であるが……) 失つたものには一層愛着が募る。参考室に行つて『四季の花事典』をひもといた。

## 辛夷の花

〈かつて壇ノ浦で破れた平家の落武者が九州・熊本の山奥に逃れたが、早春のある日突然全山が白旗で囲まれているのを見て「とてもかなわ敵ぬ」と覚悟し、全員自刃した。しかし白旗と見えたのは、じつは辛夷の花だった。〉そんな悲話わびが載っていた。清楚な美しさの中に、寂しさ、侘しさをも感じさせる花にふさわしい話とも思つて静かに本を閉じた。(ある昼さがり、「寸暇の参考室利用」の一例でした。)(受入係 田村節子)

明の宣徳の頃、宮中でこおろぎ合わせの遊びがはやり、毎年民間からこおろぎを取り立てた。成名という男がいた。こおろぎを献納しなければならなくなり、巫に占ってもらい、やっと強そうなものを見つけたことができた。期限まで大事に飼っていたところ、息子が逃がして死なせてしまった。家とび出した息子は、井戸から死体となってあがった。やっと生き返ったが昏々と眠りつづけている。悲嘆にくれていると、門外でこおろぎの鳴き声がした。捕まえてみると良種のようなのである。

試しに闘わせてみたら勝った。喜んでいると鶏がやってきて踏みつぶしそうになった。はっとしたところ、こおろぎは鶏のとさかにとまり、鶏が首を振っても振り落とされなかった。宮中でのこおろぎ合わせで勝ち、その功勞によって、成名は“秀才”になることができた。一年余りたって、息子

## 聊齋志異

— 神仙・異人・冥界・妖怪変化の世界 —



は正気に返った。「こおろぎになって、うまく闘ったよ。」

以上は、『聊齋志異』に収められている「促織」（こおろぎ）のあらすじである。

『聊齋志異』は、清朝初期の文人、蒲松齡が書いた、文語文の怪異短篇小説集で、狐、幽霊、神仙、異人（ふつうと異なる人間）などが題材になっている。

蒲松齡は官吏を志し、19歳で科挙（官吏登用制度）の予備試験に及第し生員（秀才）となったが、郷試（本試験）に11回挑戦しても合格できなかった。家塾の教師をしながら、自分で、あるいは同好の士から集めた話をもとに、

500篇近い異な話を書き続けた。才能がありながら世に受け入れられない自分を韓非に比し、自誌で「孤憤」の書であると述べ、「私を知ってくれるのは、多分あの「青林黒塞」（杜甫の詩「李白を夢む」の句）の間にいるものたち（鬼など）ではあるまいか」と結んでいる。（受入係 久保田安子）

## 図書館のコンピュータ化について

ここでは全学的な図書館の機械化という観点から書いてみます。

一般的に、そして当大学図書館でもそうですが、それはまず目録情報のデータベース化から始まっています。当館では洋書に約6年、和書には3年の歴史があります。

次に目指すものは貸出の機械化です。しかし、この実現と完成にはおよそ数年を要するものと思われます。つまり、大学図書館においては21世紀の課題と目されています。

なお、法経図書センターでは今年度後半から学生証1枚による貸出返却を実施する予定です。

3番目には、ユーザーに対する様々な情報の提供サービスがその対象になります。

例えば、法経図書センターでは各種データベース・サービスをオンラインとオフラインの両方向から実現する予定です。

他方、大学図書館が主体となって実行するOPACというシステムがあります。これは、計算機センターのホストに接続できるパソコンがあれば、当館の目録データベースにアクセスできるという非常に便利なものです。

最後に、図書館機械化の先進的なシステムを紹介します。それは、クライアント・サーバー・システムです。パソコン同士をLANでネットワーク化し、お互いにデータを共有して仕事をします。そう言ったシステムのことです。法経図書センターで実現しようとしています。（洋書係 鈴木宗一）

## 参考室あれこれ

「ロラン・バルトの最後の文章を読みたいのですが、どこに入っているのか全くわかりません。死ぬ直前に書かれたもので、内容はスタンダールの『イタリア紀行』の批評が入っています。」との質問を受けた。

すぐに『雑誌記事索引』でロラン・バルトに関する記事を探すことにした。雑誌論文の中で彼の特集でも組んでいけば年譜があるのではないかと、そこで作品名や刊年または出典などが分かるのではないかと見当をつけてみたのである。

幸いなことに、『ユリイカ』『早稲田文学』『現代詩手帳』の1985年9月あるいは10月号にロラン・バルト追悼、特集、年表

などが組まれているのを見付け出した。早速年表にあたってみると、1980年の項に「……おそらく最後に書かれたテキスト《人は常に愛するものについて語りそこなう》『テル・ケル』誌85号、秋、ミラノにおける第14回国際スタンダール学会（3月17日～22日）で発表する予定だったこのテキストは、一応完成していたらしく、交通事故の当日（2月25日）、一枚目の原稿はタイプ清書が終わり、二枚目がタイプに差し込まれていた……」とあった。

『Tel・quel』誌は1号から仏文研究室で所蔵している。さらに『早稲田文学』には、塚原史訳で上述のテキスト「On échoue toujours à parler de ce qu' on aime」の全文が載っていた。（参考係 甲斐静子）

## カウンターでの驚き

大学を卒業して、早いもので1年が過ぎました。図書館勤務になって驚いたことは、あまりにも本が無くなることです。辞書などが無くなるのは、ちょっと借りるという感覚からだと思えますが、『イミダス』など大きいものをどうやって持っていったか不思議です。もしこれを読んでいる君の手元にある本が黙って持って行った本だったら、すぐに返そう！ そっと返してくれてもいいですから。

また、読みたい本があれば、買わずに図書館にリクエストをしてみよう。希望がすべて叶うとは言えませんが、お金の節約になることはまちがいなし。その浮いたお金を、デートの時の食事代に回したらいいと思う。

とにかく、図書館はとても便利な所であり、生活に密着している所です。もっと深く使ってみると、おもしろいところです。（閲覧係 伊藤修）



## お知らせ

新入生のみなさん、ご入学おめでとうございます。これから始まる大学生活をよりよいものにするために図書館を上手に使ってください。新年度にあたって、図書館を利用する際に必要な情報のいくつかをお知らせします。

○開館時間：8：50～18：30（土曜日16：30）

夏休み、春休み中も開館しています。

○貸出冊数・期間：3冊、2週間。長期休暇

中は冊数、期間ともに枠が広がります。

○コピーをしたい時：ロビーと2階目録室にコイン式のコピー機（セルフ・サービス）があります。

※資料の探し方、研究室図書室の利用方法等は『来ぶらりガイド』をご覧ください。

○参考室に引き続き、第一閲覧室の椅子の一部が新しくなる予定です。

来ぶらり No.41 1993年4月1日発行

発行責任者：片瀬 潔 編集委員：田村節子 石田京子

学習院大学図書館 〒171 東京都豊島区目白1-5-1 ☎03(3986)0221